

血の海です、 と医者が言い。

入院
してみた

樹川さとみ



入院1年、絶食9カ月。

46才の小説家を襲った病魔の数々。

症例なしと診断され、胃の全切除を宣告されるが――。

笑いとリアリズムで綴る実録エッセイ。ゆるコワ入院日記！

もくじ

入院してみた 血の海です、と医者が言い。

まえがき	6
1 きっかけのこと	8
2 ついに入院…大学病院	23
3 胃を全摘出？	42
4 ドラマ『入院患者』	61
5 転院したこと…T病院	72
6 胸腺腫オペ…M病院	83
7 病の正体	98
あとがきのようなもの	111

まえがき

このエッセイは2013年2月から2014年3月までの入院の記録を、ツイッター上にて発表したものです。

それを加筆改稿し、電子書籍として発表後、文庫化しました。

交通事故とおなじで「自分だけは大丈夫」と考えがちなのですが、とんでもない勘ちがいでした。

気がつけば病。ふりむけば病。まだいたのか病。

そんな闘病生活。

闘病とはいってもあんまり「闘っていた」というふうには考えていないのです。

マイペースな、いち患者の記録です。

気楽に読んでいただければ幸いです。

なお、カバー絵に登場している丸いナゾ生物は『ごくちゃん』といい、不肖、私の小説『楽園の魔女たち』に登場する使い魔です。キャラクターデザインはむっちりむうにい氏。魔法使いに飼われている使い魔のくせにしゃべらない、言うことを聞かない、大喰らい、と三拍子そろった、まさしく天下無双の「ごくつぶし」。

——ですが、ごくちゃんには、すばらしい特技がひとつだけあります。すべての傷と病を癒してくれる万能薬箱なのです。

願わくは、病と向き合うすべての方に癒しがおとずれますよう。

1 きつかけのこと

自分の『胃粘膜病変』^{いねんまくびょうへん}は入院して9カ月目くらいまで原因がわかっていなかった。ために対症療法しかなく、痛み止めは医療用麻薬。○に麻^マという字が。もうすでにいろいろと心の中でツツコミたいツツコミ体質の自分。

そもそも最初の症状は胃痛だった。

そして皮膚炎。やがて食べ物を受けつけなくなり、無理して食べると吐くように。いよいよ両足に浮腫^{ふしゅ}（むくみ）が^{はじ}出始め、パンパンに腫^はれあがる。

歩くのが困難になるほどのむくみというものを、はじめて経験した。摺^すり足でゆつくりとしか移動できず、階段は片足ずつの昇^{のぼ}り降^おり。街の信号機は渡り切れずにもたもたしているうちに無情にも赤に変わる。お年寄りの気持ちを実感する。青信号は短い、短いんじやー！

やっとなさ重い腰をあげて近所の内科クリニックへ行った。
いや、もっと早く病院に行けよ！って話ですねハイ。

いちおう超個人的な言い訳はあるのだけど、それはどうでもいいので最後にゆずるとして。

ともあれ、病院への道すがら、

「ネフローゼかなあ、腎臓じんぞうやられたかな」

と、ぼんやりと思っていた。

クリニックでは念のためレントゲンも撮りましようと言われ、すなおにうなずいた。まだまだ軽い気持ちだった。

ところがそのレントゲンを見て思わずポカンと口をあけていた。

「なんですか、この白い影？」

心臓ちかくに丸い影がくつきりと写し出されていた。悪いのは胃なんですけど!!
これこそが胸腺腫きょうせんしゅだった。

ここでちょっと『胸腺腫』きょうせんしゅについてふれておきたいと思う。

私が大病院の医師から聞いたところによれば、

「胸腺きょうせんとは、

免疫の教育をする学校みたいなものです。ふつうは15歳さいくらいまでに胸腺は役目を終えて脂肪化しますが、まれに腫瘍化する人もいます」

とのこと。

レアな病気である。

胸腺腫は、悪性・良性にかかわらず「存在そのものが悪性」だという。その理由は前述のK先生いわく「かの国のように、まちがった教育をしちゃうから」だそうだ（本当にそうおっしゃった）。

かの国って！ やっぱ○朝鮮スかせんせい!?

そんな場合じゃないのにうつかり大笑い。

とはいえ、レントゲンを撮った最初のクリニックですぐに『胸腺腫』と判明したわけではない。たぶん、女医で院長のY先生にはうすうす病名の見当はついていたと思うけれど。

あくまで慎重に、

「くわしく調べないとわかりませんね。総合的に診てもらったほうがいいと思います。

うちではちよつと無理かも——」

当時の症状と血液検査の結果から、とりあえずついた病名は『逆流性食道炎』と『低蛋白血症』。タンパク質がどこから漏れているかもしれませんね、とも言われる。白血球の値が異様に低く、若干の貧血傾向あり。

入院後の精密検査で判明したことだが、実際にタンパク質が腸から漏れている部分は発見された。

発見されたが、それは『低蛋白血症』の直接の原因ではないという。なんのこっちゃ？ まあ、ありがちなことらしく重要視されなかった、というのが本当のところだ。ありがちなんですか？ こわくないですか、そんなありがち。漏れている箇所に、腸内視鏡で異常は見られなかった。

うっかり書きわすれるところだったが、私は小学生のころに肺炎からかるい腎臓炎を併発したことがあり、また伯父のひとりは腎臓が弱い。そんな不安要素もあつて、足の

むくみに関してはまず「腎臓か？」と疑ったわけだが――。

腎臓の数値は正常だった。ますます謎が深まる。

症状があれこれありすぎるため、内科クリニックで最初に処方された薬は胃酸の分泌をおさえる制酸剤（タケプロン）のみだった。

しばしば化膿かのうすることもあった皮膚炎については、これまた近所の皮膚科クリニックを紹介された。

そして皮膚科。両足のひざから下、顔、首にまで広範囲におよんでいた発赤とびらんびらんの検査。

結果「カビですね」とあっさり。

カビ。カビかつ！ 言いたくはないがここではつきり書かせてもらう。正確にはカンジダ菌である。

うわー最低。どんだけ抵抗力よわってたんだ……。

ところで誤解も多いようなので、ここで力説したい。カンジダ菌は常駐菌じょうちゆうきん、つまり「いつもキミのそばにいるよ」というカビです。どこにでもいるんです。ふだんはおと

なく目立たない存在なのに、これが人間の抵抗力が弱まってくるととたんにデカイ面^{ツラ}として表^{おもて}に出てくる。

いえ、私だつてなにもむきになってカビの擁護をしたくありませんよ。なにせ、カビは足の爪にまで及んでおり、爪のうち2枚はほとんど無くなっていたのだから。こちらはカンジダ菌ではなく白癬菌、いわゆる『爪水虫』と呼ばれるもの。

※余談。ほんとーにどうでもいいことだが、この個人経営の皮膚科クリニック。院長先生はふつーのおっちゃんだが、看護師さん、受付嬢、女性スタッフばかりなのは別に変じやないとして、例外なくもれなく美人。美女の巣窟。

なんだここはー!?と思った。

ナゾだ。

さらに余談。

このころ顔の赤味^{あかみ}は半分を占め、まるでブラックジャックかフランケンミたいな惨状になっていた。入院前日に這^はうようにして免許の更新手続きに行ったのだが、そのとき提出した超ゾンビな証明写真がそのまま私のゴールド免許に！ えっ、撮^とり直ししない

ですって!? 話がちがう!

さて、内科クリニックから皮膚科クリニックに行つたと書いた。

皮膚科で「うちから大学病院に紹介状を出しましょうか?」ときかれたのでこれ幸いとばかりに「お願いします」とうなづく。運良く、すぐ翌日の予約がとれた。

こうして胃痛いづが気がかりだったはずの私は、地元の内科クリニックにも通院しつつ、となりの市にある大学病院通いを約一カ月つづけることになった。

その変遷は、

「皮膚科」↓「呼吸器内科」↓「放射線科」↓最後にようやく「消化器内科」である。長かった。

それぞれの科でのこまかなできごとを書いてみると長くなるので省はぶくが、なぜか皮膚科で「たぶん胸腺腫きょうせんしゅ」と診断されてからは呼吸器内科へまわされ、胸腺腫の検査がメインとなった。

そのあいだ、地元の内科クリニックでは制酸剤にくわえ胃粘膜保護薬、栄養補助剤を処方してもらう。

良かったことは、栄養補助剤のおかげで浮腫（むくみ）が劇的に改善されたこと。むくみは、ネフローゼでもフィラリアでもなく、栄養不足からくる低蛋白血症のせいだった。

タンパク質が不足すぎて、体内の水分をうまく排出できなかったのだ。

ちなみにその栄養補助剤、名をエンシユアHという。ドロリとしており甘い。とてもなく甘い。どこか鉄くさい匂いがあり、個人的には「黒糖味」が一番のみやすかった。逆に悪かったことは、その大病院通いの1カ月すこしのあいだにどんどん胃の症状が悪化していったこと。

そして、むくみが取れたぶんだけ体重が一気に減りはじめたこと。

50 kg 台後半だったはずの私の体重（うちには体重計がない。いや、言い訳するわけじゃないが）は、入院するころには40 kgを切っていた。

造影CTなどの検査でわかったことは、私の胸腺腫はかなり大きくなっており、それが心臓を圧迫しているせいで心臓の周囲に水がたまっていること（自覚症状なし）。

肺にわずかに影が認められること。

肺の影の正体までは不明だったが、「肺もか！」と思ったことはたしかだ。

新たにみつかった肺の影について放射線科の先生の所見はわりと楽観的だった。

以前の病変の名残なごりと見ます、というのがその見立て。

まあたいしたことはないだろうという感じ。

でもうちの父、肺ガンで亡くなってるのよね、若いころ肺結核でサナトリウム青年してたし。

ところで各科の詳細は省くと前置きしたが、放射線科の先生があまりに印象的だったのでちよつと書いておく。ていうか書きたいので書かせて。

放射線科へ行ったのは、胸腺腫が良性か悪性であるかを判別するためだった。そのためにはまずPET検査ペットというものをする必要があった。

たぶん腫瘍などの罹患経験りかんがある方ならご存じだと思うが、このPET検査によって

ほぼ大体の見当がつけられる。腫瘍が良性か悪性か？という判断だ。

すなわちこれは「ガンかもしれないから覚悟しとけ」と同義。

そのためか放射線科は他の内科から隔離された場所にあった。

廊下から目隠しされた小さな待合室。

患者はみな表情がかたく、無口だ。

逆に助手や看護師さんは不気味なほどやさしく丁寧に接してくる。

渡された問診表も「もしガンだとわかったら告知はどうしますか？」的な質問が目白押し。シビアすぎるぜ。否が応にも緊張が高まる。

そして対面した放射線科の医師は三十代後半の男性、ハンサムとはちよつとちがうけど苦み走ったなかなかのご面相。

が。

その身にまといっている雰囲気は「寄らば斬る」的な、殺伐としたオーラ。まるで日々命のやりとりしてますという修羅のそれであった。

本当にカタギ？

その鋭い眼光でにらみつけるようにガンをとばし、こちらを見るもので、「えっ、あたしケンカ売られてるっ？」

と思ったほどだ。ぶっちゃけかなりとまどった。気の弱い人だったらここですでに泣いている。

彼はつぎに予定されているPET検査の説明等を淡々とこなしていく。

そして最後に、

「なにか訊^きいておきたいことや、気がかりな点がありますか」

とたずねた。

人生なるようにしかならない。私は、

「うーん、もし腫瘍が悪性だったら、自分より家族のほうが心配ですね」

とこたえた。

やはりそっけなく医師は「そうですね」と同意した。

このことをいつもお世話になっている内科クリニックのY先生に話したところ、ものすごくウケた。笑いむせたあとで「まあ、放射線科って特殊ですからね」としみじみおっしゃった。へーそうなんだ。

ところがである。

PET検査を終え、つぎに放射線科を訪れた私は再び驚愕する。

あの、どこぞの辻斬りか暗殺者のような放射線科の医師は、満面の笑顔でにこにこしながら私を出迎えたのである。

ええっ!?　なんでこんなに以前と態度ちがうの!?

そしてのたまわく、

「PET検査の結果ですが、悪性の兆候は見られませんでした。よかったですね!」

……いや、それはホントによかったよ、自分のためにも家族のためにもよかったよ。

てゆうかこの人ダレだよ別人じゃないの?　ずっとそんな疑念にかられていたため、ホ

ッとするとか喜ぶとかそういう当たり前の感情もどこかにふっとんだ。

なんかいろいろ衝撃的だった。

まあそのようなわけで、めでたく胸腺腫はほぼシロ——「良性」との診断が下され、

じつはPET検査の後日に予定されていた生検（生体検査）のための4日間の「検査入院」は取りやめになったのだが。そのあと事態はふたたび思わぬ方向へ。